



自分へのご褒美の旅はいかがですか

暑い季節が過ぎ去り、緑から黄・赤へうつろいゆくこの頃。
秋は一番旅行が楽しめるシーズンです。
秋の楽しみはたくさんありますが、食事と旅行は切っても切れないものです。

食事を豊かにするお菓子の存在を忘れてはいけません。
各国それぞれの文化・特色が良く出ているのがお菓子ではないでしょうか。
奥ゆかしい和菓子、ビターなチョコレート、華やかなタルト・・・
頑張っている自分に、スイーツと旅のご褒美はいかがですか。

私たちJTBは一時の幸せを感じる旅のお手伝いをいたします。

㈱JTB大阪第二事業部

〒541-0056
大阪市中央区久太郎町 2-1-25 (JTBビル12階)
TEL.06 (6260)0150(代) FAX.06 (6260)0178
担当:岡田 悠

CONTENTS

- | | |
|----------------------------|---|
| 1 カピバラ・ピアノ・カルテット インタビュー | 9 民族楽器で旅する世界 vol. 4 「インド」 |
| 4 第12回コンクール&フェスタ概要発表 | 11 作曲家の部屋 vol. 4 モーツァルト「ザルツブルク」 |
| 5 ヘンシェル・カルテット | 13 室内楽誕生!エピソード vol. 3 ヤナーチェク
弦楽四重奏曲第1番「クロイツェル・ソナタ」 |
| 6 ヴェローナ・カルテット | 15 プロデューサーが往く/カルテット・インダコを追う! |
| 7 ポルドー弦楽四重奏フェスティバル レポート | 17 トップアンサンブル シリーズ2025-2026開催決定! |
| 8 こどもクラシックミュージックアトリエ vol.6 | |



「ヨーロッパの文化と
アジアの文化の融合を楽しんで」



Copybara
PIANO QUARTET

[大阪国際室内楽コンクール2023 第2部門 第1位]

カピバラ・ピアノ・クアルテット インタビュー Interview

聞き手：奏編集部

その名前がとてもチャームな「カピバラ・ピアノ・クアルテット」は、2023年5月の大阪国際室内楽コンクール2023において、ピアノ三重奏団が並み居る中、ピアノ四重奏団として圧倒的な存在感を示して優勝した。メンバーは、近衛と岡田は日本人の両親、ヘリングは母親が日本人、キムは韓国出身と、それぞれがアジアにルーツを持ち、ヨーロッパを中心に室内楽奏者やソリストとして世界各地で活躍する演奏家4人が集まった、正にグローバルなピアノ四重奏のグループだ。今年は11月にグランプリ・コンサート2024として全国11都市で公演を行う。公演に先立ち、ピアニストのマリオ・ヘリングさんとお話を伺った。



Mario Häring, piano

—カピバラ・ピアノ・クアルテットはどんな経緯で始まったのでしょうか？

カピバラ・ピアノ・クアルテット(以下、カピバラ)は、ヴィオラの近衛剛大さんの発案で結成しました。元々室内楽アンサンブルを組みたかったヴァイオリンの岡田脩一さん、ヴィオラの近衛さん、チェロのミンジョン・キムさんに、近衛さんがピアノの私(マリオ・ヘリング)に声をかけてくれて、ピアノ・クアルテットになりました。カピバラでは、発案は近衛さんがすることが多いんです。いろいろなアイデアを出してくれれます。岡田さんは真摯で、キムさんは華やか。それぞれが違うキャラクター、ピアノ・クアルテットとして活動をしています。4人の共通点は、ゲームが大好き、ってことかな。

—チャームな「カピバラ」という名前はどのようにして決まったのでしょうか？

ピアノ・クアルテットを組もうと決めた

時、メンバーみんなで名前のアイデアを出し合いました。作曲家の名前などにする、そのイメージに紐づけて私たちがのことも考えられてしまうのではないかなと思いましたが、そこで、「メンバーみんなが好きなもの」などの共通点を探したのです。そしてある時、近衛剛大さんから「カピバラはどう？」という提案があり、みんなが「それだ！」と意見が一致して、名前が決まりました。

—大阪国際室内楽コンクール2023にエントリーしたきっかけは？

まだアンサンブルを組み始めてから日が浅かったのですが、「みんなで日本に行こう！」と、このコンクールへの参加を近衛さんが提案してくれました。メンバーみんな日本が好きなので、「日本に行きたい！」という気持ちが強く、エントリーすることに決めました。予備審査を経て、日本に行くことが出来るのが決まった時はみんな本当に喜びました。



Takehiro Konoe, viola

—メンバー念願のコンクールでの来日。思い出を教えてください。

コンクール本番、何よりも日本に、大阪に来ることができて嬉しかったです。まずは1次予選。「楽しく、そして自由に」演奏を終えた結果、2次予選に進むことが出来ました。そこから、私たちは「やってみよう！」と本気モードに切り替わりました。大阪にいる間、練習も本当にたくさんしました。あつという間に本選、そして優勝という結果に、私たち自身とても驚き、喜びました。

—大阪国際室内楽コンクール2023での優勝を経て、変化したことはありますか？

演奏家にとって、プロフィールに「コンクール優勝」と書くことが出来るのは、とても意味のあることです。演奏の機会が増えるからです。

カピバラは、メンバーは欧州各地に住み、それぞれがソリスト、オーケストラなど



Minyoung Kim, cello

—アンサンブルとして大切にしている事がありますか？

室内楽のアンサンブルを長年組んでいくと、メンバー一人ひとりの考えている「ゴール」が違ってくるなど、続けていくことが難しくなることもあります。だからこそ「楽しく、そして自由に」という価値観で、アンサンブルを続けていければと思います。そして、みんなでたくさん旅が出来たら嬉しいなと思います。



第12回 大阪国際室内楽コンクール&フェスタ

2026年5月開催決定!

OSAKA INTERNATIONAL CHAMBER MUSIC COMPETITION & FESTA

コンクール | 2026年
5/17(日)~24(日)

フェスタ | 2026年
5/9(土)~13(水)

会場:住友生命いずみホール(大阪)

第1部門 弦楽四重奏

第2部門 ピアノ三重奏/ピアノ四重奏

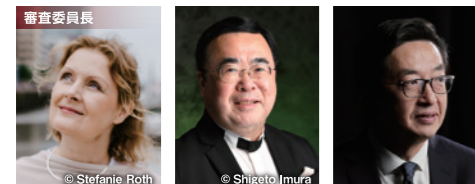
▶対象

2026年5月17日時点で35才以下の演奏家により構成される団体
(1990年5月18日以降に出生の者)

▶開催日程

2026年	5月17日(日)	第1部門 1次ラウンド
	18日(月)	第2部門 1次ラウンド
	19日(火)	第1部門 2次ラウンド
	20日(水)	第2部門 2次ラウンド
	21日(木)	第1部門 3次ラウンド
	22日(金)	両部門 ファイナルラウンド 表彰式
	23日(土)	大阪披露演奏会
	24日(日)	東京披露演奏会

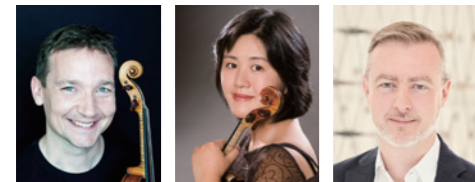
▶コンクール審査委員



モニカ・ヘンシェル
ヴァイオリン/ドイツ
ヘンシェル・クアルテット

澤 和樹
ヴァイオリン/日本
澤クワルテット

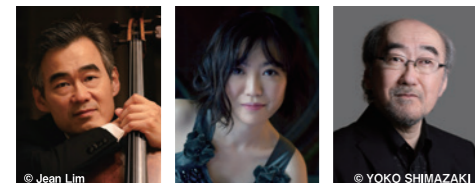
ウェイガン・リ
ヴァイオリン/アメリカ
上海クアルテット



オリヴァー・ヴェイ
ヴァイオリン/ドイツ
クス・クアルテット

元渕 舞
ヴァイオリン/日本・アメリカ
元ボロメオ弦楽四重奏団

アリステル・テイトル
チェロ/イギリス
元ペルチャ・クアルテット



サンウォン・ヤン
チェロ/韓国
トリオ・オウオン

相沢 更江子
ピアノ/日本・アメリカ
ホルショフスキ・トリオ

野平 一郎
ピアノ/日本
東京音楽大学学長

▶新作委嘱作曲家



酒井健治
大阪出身
京都市立芸術大学准教授

コンクール
第1部門3次ラウンド
課題曲を委嘱

▶対象

2~6名の器楽アンサンブル

楽器編成
自由

年齢制限
なし

一般聴衆
審査

より幅広い表現を受け入れます

大阪国際室内楽フェスタは、クラシック音楽だけでなく、民族音楽、伝統音楽も対象です。そして今回は、器楽演奏に付随するより幅広い表現を受け入れる予定です。

多様性を映す新しい「賞」

より多様な“室内楽”が集う祭典として、これまでの「メニューイン金賞」や「フォークロア特別賞」のほか、各種器楽編成を対象とした賞、新しい表現を称える「ニューウェイブ賞」など様々な特別賞を設けます。

三重・富山で1次ラウンド開催!

前回に引き続き、1次ラウンドを三重・富山で開催し、全国の音楽愛好家の皆様と室内楽の楽しみを共有します。また、大阪ではセミファイナル&ファイナルラウンドのほか、惜しくも1次ラウンドに留まった団体が出演する「ENSEMBLE SHOWCASE」を開催。すべての団体に大阪での演奏機会があります。

▶開催日程

2026年	5月9日(土)	1次ラウンド(三重/富山)
	11日(月)	SHOWCASE #1
	12日(火)	セミファイナル/SHOWCASE #2
	13日(水)	ファイナル/表彰式

▶フェスタ審査員

事前に公募した一般審査員と、主催者が委嘱した特別審査員の投票によって行います。

コンクール&フェスタ共通
今後のスケジュール
(予定)

※日程は変更となる場合がございます。

	春	募集要項発表
2025年	4月	参加団体募集開始
	10月	参加団体募集締切
	11-12月	予備審査
2026年	3月	参加団体発表

詳細は、2025年春に発表予定です。
最新情報は日本室内楽振興財団ウェブサイト、SNSでご確認ください。



— 今回のグランプリ・コンサート2024 ツアーの曲目はどのようにして決めたのでしょうか? —
今回は多くが新しいレパートリーとなります。ピアノ四重奏曲の新しいレパートリーを開拓するとき、やはり一番難しいのはピアノです。ということ、まずはみんながアイディアを出して、最終的には私がOKをするかどうか、なのです(笑)。それぞれの好きな曲や弾いてみたい楽章等から選びました。



コンクール2023の合間に、大阪のカピバラ・カフェにて

— 最後に日本のお客様に、メッセージをお願いします。 —
コンサートでは様々な「たのしみ」を会場のお客様とシェアしたいと思っています。そして私たちカピバラは、ヨーロッパの文化とアジアの文化が混ざり合っている中、生きています。その融合をぜひお楽しみいただければと思います。是非、コンサートにご来場下さい。

カピバラ・ピアノ・クアルテット Capybara Piano Quartet

マリオ・ヘリング(ピアノ) Mario Häring, piano
岡田 脩一(ヴァイオリン) Shuichi Okada, violin
近衛 剛大(ヴィオラ) Takehiro Konoe, viola
ミンジョン・キム(チェロ) Minjung Kim, Cello



カピバラ・ピアノ・クアルテットは、ヨーロッパのバリ、ベルリン、アムステルダム、クロンベルクの4都市から集まった若手ソリストの出会いから結成された。名門の小澤征爾国際アカデミーで、原田禎夫と今井信子という名高い先輩から指導を受けた岡田、近衛、キムが室内楽への情熱を共にして、ピアニストのヘリングと一緒にピアノ四重奏団として歩み出した。それぞれが主要な国際コンクール(ミュンヘン、ジュネーヴ、リーズ、クライスラー、カサド)で入賞経験を持ち、ヨーロッパ内外の著名なステージでソリストや室内楽奏者として出演している。大阪国際室内楽コンクール2023では、他の国際室内楽コンクールで入賞経験のあるピアノ三重奏団が並み居る中で、圧倒的な存在感を示して第1位を獲得した。



グランプリ・コンサート2024 スケジュール

日時	開演	公演地	プログラム	会場
11/2(土)	14:00	熊本	A	益城町文化会館
3(日)	14:00	大分	A	くにさき総合文化センター
5(火)	19:00	宮崎	A	小林市文化会館 小ホール
7(木)	11:30	三重	※	三重県文化会館 小ホール
8(金)	14:00	神奈川	B	海老名市文化会館 小ホール
9(土)	14:00	静岡	※	沼津市民文化センター 小ホール
11(月)	19:00	大阪	B	住友生命いずみホール
14(木)	19:00	鳥取	A	鳥取市文化ホール
15(金)	18:00	広島	A	庄原市民会館
17(日)	14:00	東京	A	トッパンホール
18(月)	19:00	富山	A	富山県高岡文化ホール 大ホール

プログラム A
マーラー: ピアノ四重奏曲 イ短調
シュニトケ: ピアノ四重奏曲
モーツァルト: ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K.478
シューマン: ピアノ四重奏曲 変ホ長調 op.47

プログラム B
マーラー: ピアノ四重奏曲 イ短調
メンデルスゾーン: ピアノ四重奏曲 第2番 ヘ短調 op.2
シュニトケ: ピアノ四重奏曲
ブラームス: ピアノ四重奏 第3番 ハ短調 op.60

※11/7三重公演は シューマン/シュニトケ/モーツァルト ほか
11/9静岡公演は モーツァルト/メンデルスゾーン/シューマン
のプログラムで実施します。



第8回大阪国際室内楽コンクール 第1部門第3位

ヴェローナ・クアルテット

Verona Quartet

～弦楽四重奏大国アメリカで頭角を現す俊英

プロの弦楽四重奏団として生きる～ヴェローナ・クアルテット

様々な矛盾を抱えるアメリカ合衆国だが、多彩な才能が集まり、目標に向けて力を合わせ、何かを成し遂げる可能性が未だにある場所だ。とりわけ弦楽四重奏というジャンルに限れば、北米地域はプロ団体育成の過程が制度として整っている世界で唯一の文化圏なのである。結果として、弦楽四重奏を目指す才能が世界中から北米に集まることになる。

2015年、かつてシユタルケルや堤剛も教えたインディアナ大学シエイコプス音楽学校で、シンガポール生まれのヴァイオリニストやカリフォルニア出身のヴィオリストなど、世界からやって来た4人の若者が、ヴァス・ムートQなる弦楽四重奏団を結成した。結成翌年、大阪に挑戦し3位。その後、第2ヴァイオリンがアジア系カナダ人に交代、些が発音が困難だった名称もヴェローナQと改める。

そして、メルボルン3位、ロンドン大会2位。常に美しい響きの基本に忠実なアンサンブルは、メイジャー大会での成果を着実に積み上げる。その結果、ジュリアード音楽院、デンシィ、ニューイングランド音楽院、クアルテット養成コースレジデンシィと、多くの先輩クアルテットも歩んだ常設プロ団体への道が開けた。半学生としての徒弟生活である。

ジュリアードQや、元クリフランドQのポールカツ、ボロメーオQなどの先輩に教えられ、自分らも若い学生に教えることで、教育スタッフとして音楽に接する。作曲家や聴衆との関係の作り方、演奏旅行のノウハウなど、演奏団体として学ぶことも多い。その間に、チェロがヨーク

シャー出身のイギリス人に交代。ヴァス・ムートQとして大阪に来たメンバーも今や半分となった。だが、これも常設のプロ団体として生きていくためには不可欠な、人生の選択なのだ。

学生の立場を終え、若きプロとしてオーバリン大学音楽院のファカルティのポジションが決まった冬、コロナ禍が世界を襲う。多くの若き弦楽四重奏団を淘汰することになる氷河期をヴェローナQは大学教員として耐えた。そして今、時どき弦楽四重奏団に必要とされる要素を高いレベルで満遍なく備えたヴェローナQは、世界に乗り出そうとしている。

弦楽四重奏として生きていくと自信を得た4人には、それぞれの目標がある。例えば第1ヴァイオリンのジョナサン・オンの野望は、故郷シンガポールにしっかりと室内楽の土壌を築くこと。昨年の香港室内楽音楽祭招聘、9年ぶりの大阪は、そこに向けた最初の一步だ。多様性の中で音楽による夢の実現。それがヴェローナQ。

公演情報

- 公演日程 2025年3月1日(土) 15:00開演 ■会場 読売テレビ 10hall
- プログラム メンデルスゾーン:弦楽四重奏曲第1番 変ホ長調 op.12
ヤナーチェク:弦楽四重奏曲第1番 ホ短調「クロイツェルソナタ」
ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第8番 ホ短調 op.59-2「ラズモフスキー第2番」
- 全席自由 一般 5,000円/友の会 4,500円/学生 1,500円

ヴェローナ・クアルテット(弦楽四重奏/アメリカ)

ジョナサン・オン(ヴァイオリン)/ドロシー・ロー(ヴァイオリン)
アビゲイル・ロジャンスキー(ヴィオラ)/ジョナサン・ドーマンド(チェロ)

ウィグモアホール、大阪国際室内楽コンクールでの入賞で国際的な名声を高め、2020年にクリーヴランド・クアルテット賞の受賞で「大胆な解釈力、強い個性と堂々とした響き」と評されたアメリカの若手を代表するアンサンブル。カーネギーホール、リンカーンセンター、ケネディセンター、ウィグモアホール、メルボルンなど4大陸で出演して聴衆を魅了し、数多くの音楽祭にも参加している。シンガポールのヨン・シュー・トー音楽院、マサチューセッツ工科大学などにも招聘されている。クアルテット・イン・レジデンスとして教鞭を執るオーバリン大学に加えて、ルーネンバーグやノースカロライナでもレジデンスを務める。近代音楽の普及に加え、異文化間とのコラボレーションに熱心に取り組んでいる。デビューCDである、ヤナーチェク、ラヴェル、シマノフスキーを収録したDiffusionは、BBCミュージックマガジンに「まぶしいほどの輝き」と称賛された。

TOPIC

会場の「読売テレビ10hall」はこんなところ!

ヴェローナ・クアルテットのコンサートが開催される「読売テレビ10hall」は、大阪ビジネスパークにある読売テレビ本社ビル1Fにあります。目の前にはホテルニューオータニ大阪、そして大阪城公園が広がっています。ご来場の際は散策してみてくださいいかがでしょうか?



読売テレビ本社ビル



読売テレビ10hall

〒540-8510
大阪府中央区城見1丁目3番50号
JR大阪城公園駅より徒歩5分
京阪京橋駅より徒歩10分
地下鉄大阪ビジネスパーク駅すぐ

10hallの情報はこちら▶



ザ・フェニックスホールに集うトップアンサンブルシリーズ 2024-2025

大阪国際室内楽コンクール入賞団体が、大阪に再び

文:渡辺 和(音楽ライター)



第2回大阪国際室内楽コンクール 第1部門第1位

ヘンシェル・クアルテット

Henschel Quartet

～受け継がれる正統派ドイツサウンド

伝統の中で生きる～ヘンシェル・クアルテット

ヘンシェル・クアルテット(以下Q)は、音楽一家のアンサンブルである。父はシュトゥットガルト放送交響楽団首席ヴァイオリン奏者で、母はチェンバロ奏者。子ども達は幼い頃から家にあつた楽器を弾き、姉さんがヴァイオリンを担当し、卵性双生児の弟らがヴァイオリンを分け合った。集まって合奏のまねごとをしていると、当時ヘンシエル家に居候のように住んでいたチェリビタツケが本気で指導を始め、ひとりの才能を高く評価、指揮者になるよう勧めたという。

やがてヘンシエル家の姉弟は、チェロを加えて弦楽四重奏に取り組むようになる。その頃、演奏活動を停止し教育に専念し始めたアマテウスQがその才能に惚れ込んだ。父の引退後、ミンヘンに移っていた音楽一家の娘息子は、老匠匠らが各地で開催するセミナーに一番弟子のような形で付いて歩き、アマテウス翁の至芸を汲み取っていた。

30年前、ヘンシエル家の若き音楽家はひとりの同世代チェリストと出会う。戦後の古楽復興運動初期の名団体コレキウム・アウレウムのヴァイオリン奏者にして、モーツァルト(レクイエム)の補筆楽譜者として知られるフランツ・バイヤー博士の孫だった。あらためてヘンシエルQを名づけた若者達は、ミンヘン旧王宮近くの大学通りのバイヤー家を練習場に、のしかかる様々な伝統の重みに演奏されることもなく、いかにもドイツ風の骨太な音楽を構築していく。そして1996年、第2回大阪国際室内楽コンクール第1部門を、ベートーヴェン作品127の圧倒的演奏で制覇した。

大阪優勝後、目の前に提示された「スター」としての道をヘンシエルQは意図的に選ばなかった。ヨーロッパの室内楽界を牛耳るマネージャーからの誘いも、考え

優勝後の記者会見にて



第2回コンクールでの演奏



戦後ヨーロッパ音楽最高の才能に磨かれたヘンシエルQは、文字通りヨーロッパの伝統を継承する弦楽四重奏団だ。そこにあるだけで、当たり前のように伝統である音楽。それがヘンシエルQ。

方の違いから断る。ドイツ・グラモフォンにも録音したが、ブランド名に拘らず自分の音楽が出来る場所を求め、世界を演奏して歩く活動をしつつも、自分らが人として生きていくことと弦楽四重奏の活動とを無理なく折り合いを付ける道を選び、今に至っている。

公演情報

- 公演日程 2024年9月27日(金) 19:00開演
- 会場 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
- 曲目 メンデルスゾーン:弦楽四重奏曲第3番 二長調 op.44-1
シューベルト:弦楽四重奏曲第13番 イ短調 D804「ロザムンデ」
ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第9番 ハ長調 op.59-3「ラズモフスキー第3番」
- 全席指定 一般 5,000円/友の会 4,500円/学生 1,500円

ヘンシェル・クアルテット(弦楽四重奏/ドイツ)

クリストフ・ヘンシエル(ヴァイオリン)/ダニエル・ベル(ヴァイオリン)
モニカ・ヘンシエル(ヴィオラ)/マティアス・バイヤー=カルツホイ(チェロ)

1994年にチェロのマティアス・バイヤー=カルツホイが、クリストフ、マルクス、モニカ・ヘンシエル兄弟に加わり、本格的に弦楽四重奏に専心した。1995年にはエヴィアン、バンフなどの国際コンクールで入賞、翌年には大阪国際室内楽コンクールで第1位。以降、欧州だけでなく世界各地での演奏活動を続けている。2010年にはローマ教皇の御前で演奏。定期的にマドリードの王宮に招待され、王宮コレクションの4挺のストラディヴァリでの演奏を行っている。2012年にサントリーホルのベートーヴェン弦楽四重奏サイクルに招聘される。同年モニカは、新設されたドイツ弦楽四重奏連盟の会長に就任。近年では歴史の陰に隠れてしまった名曲に光を当てた活動が評価を得ている。世界中の一流音楽教育機関から指導に招かれ、出身地であるミンヘンの青少年音楽プロジェクトのために、バイエルン文化省と協働している。2006年より「SOS子どもの村」のアンバサダーを務める。



©HPRemark

NEWS



大阪国際室内楽コンクール2023より、モニカ・ヘンシエルは副審査委員長を務めた。

ヘンシエル・クアルテットのモニカ・ヘンシエルさんは、2026年に開催する第12回大阪国際室内楽コンクールにおいて審査委員長を務めます。(詳細は本誌P.4の開催概要をご確認ください。)

モニカ・ヘンシエルからのメッセージビデオはこちら



タレイア・クアルテットが
ボルドー弦楽四重奏フェスティバル
に参加しました！



大阪国際室内楽コンクール2023では、海外のフェスティバルに参加できる特別賞が設定されていました。その第1弾として、タレイア・クアルテットが、フランスのワインの名産地・ボルドーで開催された「ボルドー弦楽四重奏フェスティバル」に参加しました。
現地の様子のレポートが、タレイア・クアルテットから届きました！



石崎
ボルドーでの生活で印象的だったのは、日照時間が日本よりも長く、コンサートが夜の10時に終わってもまだ夕方のような明るさだったことです。日本での慌ただしい生活とは違い、全員で同じコンサートを鑑賞して意見を交換したり、ゆっくりワインを飲みながら食事をするのができて、とても良い時間を過ごすことができました。
ボルドーでお世話になったホストファミリーのご夫妻はとても親切で、マスタークラスやコンサート会場まで連れて行ってくださったり、毎日美味しい朝食を用意してくださり、音楽祭期間中音楽に集中することができました。



最後になりましたが、大阪国際室内楽コンクールをきっかけに、今回のボルドー弦楽四重奏フェスティバルに参加させていただけたこと、心より感謝申し上げます。今後もこの貴重な経験を生かして精進していきたいと思います。

渡部
小学校でのアウトリーチの際、到着するや否や校門にて熱烈な歓迎を受けたのもとても印象深い思い出です。とても国際色豊かな小学校で、質問コーナーでは英語や日本語で質問してくれた子もいました。現地に住む日本人の音楽家の方の通訳に助けられ、フランスに住む様々なルーツを持つ子供たちと交流できた嬉し体験でした。
音楽祭の終盤には寺院でのコンサートに出演させていただきました。コンサートホールとは違う音響の中でどの様に自分たちの演奏をお客様に魅力的に届けられるか、試行錯誤しながらリリハーサルをする事ができました。アンコールに日本の民謡を演奏したのですが、大変盛り上がり過ぎていただいて私たちにとっても忘れられないコンサートになりました。



タレイア・クアルテット THALEIA QUARTET
山田香子(ヴァイオリン)、二村裕美(ヴァイオリン)、渡部咲耶(ヴィオラ)、石崎美雨(チェロ)
2014年東京藝術大学在学時に結成。ザルツブルク=モーツァルト国際室内楽コンクール2015年第3位、第4回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位受賞。東京藝大アートフェス2022においてゲスト審査員特別賞受賞。公益財団法人松尾学術振興財団、榎本文化財団、光山文化財団、業務スーパー・ジャパンドリーム財団、公益財団法人板橋区文化・国際交流財団より助成を受ける。プロジェクトQ第15、16、17、19章に参加。サントリーホール室内楽アカデミー第5期フェロー。NHK音楽番組「らららクラシック」、「クラシックTV」に出演。

主催事業レポート



二村
フェスティバル中は、モディリアーニ弦楽四重奏団のリサイタルを皮切りに、ほぼ毎日演奏会が行われていました。このフェスティバルでは参加した全団体が、リサイタル形式のコンサートに出演することができました。イギリス、イタリア、フランスなど、同年代のクアルテットのステージは、演奏やそれぞれの世界観、この先それぞれのグループがどうなっていくのだろうかなど感じ取るものが多く、良い刺激を受けました。
また日本で弦楽四重奏という、年配の方や、聴衆の中でもベテランのファンが多いイメージもありますが、コンサート会場には、小学生くらいの子連れの家族や若いカップルなども見受けられることもあり、聴衆の年齢層の幅が広いこと、身近さにも驚きました。

山田
ボルドー弦楽四重奏フェスティバルでは、毎日のようにマスタークラスやワークショップを受講させていただき、とても濃密な10日間を過ごすことができました。
期間中、9回のマスタークラスに加え、音楽解剖学、法律、トーク、姿勢学、レコーディングのワークショップを受講しました。マスタークラスでは、モディリアーニ弦楽四重奏団とキトグート弦楽四重奏団の皆様にレッスンをさせていただき、新しいアイデアやアプローチに大変刺激を受けました。数々のワークショップは、日本では受けたことのないような斬新な内容で、それぞれの専門分野の先生方が詳しく教えていただきました。音楽家として演奏する上で知っておくべきことや、改善すべき点にも改めて気付かされ、大変勉強になりました。



調査研究事業

こどもクラシックミュージックアトリエ vol.6

2024.8/16(金)
①11:00-12:00 参加者 19組 56名
②14:00-15:00 参加者 22組 72名
住友生命いずみホール
対象：小学生とその保護者
料金：無料(事前応募によるご招待)
出演：上敷領 藍子(ヴァイオリン)
相原 瞳(ヴァイオリン)
後藤 彩子(ヴィオラ)
佐藤 響(チェロ)
主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団
住友生命いずみホール(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)
後援：読売テレビ、大阪市



演奏曲
セイキロスの碑文
グレゴリオ聖歌
キャロライン・ショウ：Orangery
越天楽
ヴィヴァルディ：四季
ボロディン：弦楽四重奏曲第2番
さくらさくら
ラヴェル：弦楽四重奏曲
ガーシュウィン：アイガットリズム
コジモ・カロヴァニ：Ancient Dance Tune
ほか



「こどもクラシックミュージックアトリエ」は、調査研究事業「子ども向け音楽プログラム開発」の研究の一環として、2022年より住友生命いずみホール(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)と共同で実施しています。
6回目となる今回は小学生とその保護者を対象に、住友生命いずみホールの舞台上で鑑賞するコンサートプログラムを企画し、実施しました。
今回のコンサートは、「クラシック音楽ってなんだろう?」という問いかけ

からスタート。「クラシック音楽ってなあに?」をテーマに、古代ギリシャの音楽から、「クラシック音楽」として知られる曲、そして現代音楽まで、様々な音楽を耳で楽しみ、そして「クラシック音楽」について考える1時間のコンサートでした。
今回も開演前、終演後はロビーで楽器体験を開催!どうやって持つ?チェロってこんなに大きいんだ!習ってみたいな!などの声があがりました。

お客様の声(アンケートより抜粋)

- ♪最初の曲で、歌いながら入って来られたとき、歌とバイオリンの響きが本当に美しく、心が震えました!
- ♪雅楽を弦楽器で演奏されたのがよくできていて面白く聞きました。
- ♪クラシックのイメージと違うヘリコプターに乗っての演奏や、観客も声を出して参加する現代音楽が珍しくておもしろかったです。
- ♪ラヴェルの演奏が迫力があってすごく楽しめました!
- ♪馴染みのない選曲もありましたが、聴き応えがあり、弦楽の魅力が堪能できました。
- ♪年表もわかりやすく大人にも参考になりました。客席が舞台上にあるのも斬新で新鮮でした。ありがとうございました!

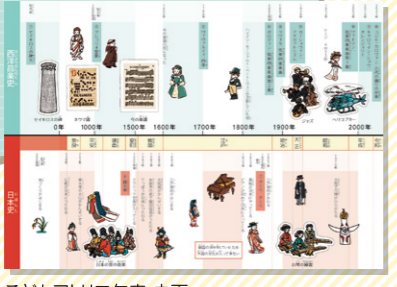
後藤彩子さん(ヴィオラ奏者)にお話を聞きました

このコンサートは、日本室内楽振興財団の調査研究事業委員として後藤彩子さんが中心に企画を行っています。今回のプログラムでは、このようなコンサートには珍しく現代音楽を多く取り上げていました。その理由をお伺いしました。



後藤 ここでしか聴けない音楽を聴いてもらいたかったから、です。なかなか他の子どもを対象としたコンサートで聴く機会は少なく、子どもたちに聞いてもらうならここで演奏するしかない!と思って、プログラムにいれました。そして、それは一緒にコンサートを創るメンバーを信頼しているからこそ出来ることです。

次回予告
こどもクラシックミュージックアトリエ vol.7 事前応募・招待制
2024.3月 2回公演予定 住友生命いずみホール
対象・応募方法等の詳細は決定次第、日本室内楽振興財団ウェブサイトでお知らせします。



こどもアトリエ年表 中面

インドの民族楽器

いま世界でもっとも人口の多い国は、
多様な音楽文化も持つ

インド音楽って、と聞かれ、これ、と具体的に答えることが出来る楽曲はないけれど、ああ、こんな感じ、と言える人も多いのでは。かつてはビートルズを魅了し、最近ではインド映画も日本でヒットしている。インドの楽器に迫る。

構成・文／片桐卓也



タブラー&バーヤ

インド伝統の打楽器だが、タブラーは高音用、バーヤは低音用で、ふたつ合わせて使う。そこから「タブラーバーヤン」と呼ばれることもある。ポディは、タブラーが木製でバーヤが金属製。ポディに張られるのはヤギの皮だが、それは上面だけで、ポディの下の部分は閉じている。東アジアの太鼓とはちょっと違う構造なのである。またタブラーのポディには「スヤヒー」と呼ばれる鉄粉と穀物を練り込んだ塗料を塗ってあり、倍音が出やすい工夫がされているのも特徴的。右手は高音のタブラー、左手は低音のバーヤを叩く。奏法はかなり難しいようで、映像で観ていると、どんなリズムで左右を叩いているのか把握するのも大変。一度、教わってみたい。



タンプーラ

タンプーラも撥弦楽器だが、シタールなどと大きく違うのは、楽器を立てて演奏することだろう。楽器を後ろから抱えるようにして弾くスタイル。楽器の胴はシタールなどと似て、下部に大きなひょうたん型の共鳴胴があり、そこに長い指板を付ける。駒は象牙製。低音をずっと鳴らし続ける持続低音楽器として、アンサンブルを支える楽器である。基本的に開放弦で演奏され、指で弦を押さえず、弦を1本ずつ弾いて行く。その弦の音程は5度音程で、弦の数は4〜6本と様々なようだ。由来はよく分からないが、インドに古代からあった楽器がイスラム文化の影響を受けて発展し、現在の形になったと言われる。北インド音楽には欠かせない存在だ。



シタール

これがインドだな〜と思う音として、誰もが脳裏に浮かべるのはシタールの少し金属的な響きではないだろうか。おそらく13世紀頃からはこのような形になって演奏されていたと言われる。ひょうたんから作られたボディに金属製の弦を張り、それを金属の爪(ミズラブ)ではじいて演奏する。弦の数は19本。フレットのある指板に7本の弦が張られ、その下に12弦の共鳴弦がある。棹の上部にも共鳴用の木が使われるのも弦楽器としては珍しい。1960年代にビートルズなどがインドを訪れて、シタールの巨匠ラヴィ・シャンカルと交流を重ね、彼らのサウンドの中にも取り入れられた。古代インドの「ヴィーナ」から発展したとも言われている。



サントゥール

くるみの木から作った台形のボディに金属製の大きな弦を張り、それをやはりくるみなどの木から作った軽い棒で叩いて音を出す打弦楽器。ペルシャ(現イラン)またはインドが発祥と言われ、現在では北インドでも主要な楽器として使われるようになった。東欧で使われるツィンパロンなども同属の楽器である。この弦を叩くという発想が打弦楽器のひとつであるピアノの誕生に影響を与えたという説もある。奏法も多彩で、一度打ち、2回打ち、さらには連続打ち、そして片方の棒で弦を打ちながら、一方の棒で弦のはじっこをこすって音を揺らす(ミーンドと呼ばれる奏法)など、ちょっと見ただけでは分からない複雑な打ち方を組み合わせている。



パンスリー

竹製の横笛である。竹で作られるということは尺八と素材は同じということになるが、その響きはもっとクリアに聴こえる。北インドのヒンドゥスターニー音楽(13世紀以降のインド古典音楽)に欠かせない楽器のひとつである。ちなみに南インドではヴェーヌと呼ばれる横笛が使われる。この横笛はかなり古くから使われていたらしく、古代インドの仏教、ヒンドゥー教の宗教絵画の中にもよく描かれている。ヨーロッパでフルートが発達する前、ビザンツ帝国からこの楽器が西欧に伝わり、大きな人気を博したという研究もあるようだ。ヒマラヤ山脈南麓で育った竹を素材に、その節に7つほどの穴を開けて楽器とし、それを吹くようになったと言われる。



ハーモニアム

一見すると小さなアコーディオンだが、もっと複雑な機構を持っているのがハーモニアムだ。基本的にはオルガンと同じで、木のボックスに入られた金属製のリードを、空気を送り込むことによって鳴らす楽器だ。その祖先は19世紀半ばにフランスで開発されたハルモニウムだが、インドのハーモニアムはかなり小型で、持ち運びが出来るものが主体になっている。奏者側に鍵盤が付いており、その鍵盤の後ろ側に空気を送り込むふいご(蛇腹)が付いている。運ぶ時は小さな箱となり、それを広げて楽器とする。片手で蛇腹を動かしながら、片手で鍵盤を弾く。また、ひとつの音を持続させることができるボタン(オルガンのストップ)が付いているものもある。



サロード

こちらも弦楽器だが、小振りな撥弦楽器である。演奏法もかなり違う。サロードにはフレットが無く、指板の上を、自由に指をすべらせて演奏するスタイルを採っているからだ。奏者は右手の腕でボディ部分を押さえ、ココヤシから作ったプレクトラム(爪)で弦を弾いて演奏する。左手は、指板の上に張られた弦を自由に行き来する。シタールと同じ点は、指板の上の部分(ヴァイオリンで言えば糸巻きのあたり)に共鳴用の箱が付いている点。そもそも「サロード」はペルシャ語で「美しい音」を意味する言葉で、それが楽器の名前となったと言われるが、時代が下るにつれて、様々な西アジアの同属の楽器と混じり合い、現在の形になったという研究もある。

こういう場所で聴ける

まず映画などで音を確認。そしてライブハウスを検索してみよう。最近では、インド・カレーの店がない通りを発見するのが難しく、インド料理は身近なものになっている。しかし、インド音楽を聴こうと思っても、なかなか簡単にはコンサートが見つからない。とりあえずは、日本でも大ヒットしたインド映画などを検索して、観てみよう。もちろん映画の音楽は現代的に編曲されたものばかりだが、その中にはインド古典音楽の要素が入っていることもある。また近年では日本人でインド音楽を専門に演奏している人も増えて来ている。その代表格がタブラー奏者のG.N. Ramana(グザン)。彼はアルバムも発表しているし、ライブも各地で開催している。彼のホームページをチェックすると、様々なライブハウスで色々なジャンルのアーティストと演奏を行っていることが分かる。また、インド現地でも活躍する巨匠クラスの音楽家の来日公演もミッドでチェックすると出て来ることもあるので、根気強く検索してみよう。インド音楽専門のライブハウスが出来れば面白いけれど、インド料理店でも音楽関係のチラシが置いてあるところもあり、まずは食からインドに接近してみるのも良さそう。ちなみに筆者はほうれん草のカレー(とりわけマトン)が好き。

Wolfgang Amadeus Mozart モーツァルト「ザルツブルク」



ザルツブルク市内から見えるアルプスの山々

生涯通して旅をし続けた作曲家、モーツァルト。そんな彼にも故郷がありました。25歳まで過ごした、オーストリア・アルプスの麓の街ザルツブルクです。

モーツァルトを取り巻くザルツブルク的环境

1756年1月27日、ザルツブルクの市街地にある建物の一室で、モーツァルトは生まれました。普通の親であれば、子供が生まれれば喜ばしいものですが、どうやら少し違ったようです。

モーツァルトにはナンネルという姉が一人いましたが、実はモーツァルトが生まれる前に5人の子供が早くに亡くなっており、7番目の子として生まれました。「どうか元気に生きてほしい」という親の願いはもちろんあったものの、何も憂いなく誕生を喜ぶことはできませんでした。

さらにこの頃、宮廷ヴァイオリニストだった父レオポルトは、人生を賭けて執筆した「ヴァイオリン教本」の出版のために奔走しており、出版社とひっきりなしにやり取りをしていました。そのため、この時期のレオポルトの手紙に、息子の誕生について言及されている部分は僅かしかないのです。

当時裕福な家庭とは言えなかったモーツァルト家ですが、なげなしのお金を使って、息子を「娘も同様に」神童として各地で演奏させました。特に学校に通ったわけでもないモーツァルトですが、父の教育のおかげでかなりの知識人として育ちました。

父はバイエルン地方のアウクスブルク出身で、ザルツブルク大学で哲学と法律を専攻しており、その知識を息子との旅の道中に分け与えていたのです。

同じく作曲技法の基礎やヴァイオリンは父から学びつつ、先人たちが書いた作品が編纂された楽譜をチェンバロで演奏し、はたまた複写し、研究しながら自分のものにしていきました。ザルツブルクには、かつて音楽家のH・F・ビーバー、ゲオルグ・ムファアットが活動しており、モーツァルトの時代にはあの有名な



モーツァルトの生家

ハイドンの弟ミハエルが住んでいました。そこでモーツァルトは、ミハエル・ハイドンに今後の人生の相談をしていたようです。

クではカトリック教会の大司教が大きな権力を誇っていたため、多くの宗教曲を書かなければなりません。大抵の宗教曲は、既存の歌詞やテンプレートに則って作曲しなければいけないだけでなく、複雑な対位法を駆使しなければならぬこともあり、モーツァルトの作曲技術にほとんど磨きがかかりました。

ザルツブルクでの活動

先ほども述べた通り、ザルツブル

1769年(13歳)、そんなモーツァルトは、宮廷楽団で無給の音楽家として働き始め、需要に合わせて作曲、演奏をしました。

意味を持たない純器楽曲も作曲しました。その目的は大きく三つに分けられます。一つめは、自分の勉強のための作品、すなわち習作のような作品です。例えば弦楽五重奏曲第一番は、17歳のモーツァルトがミハエル・ハイドンを参考に書いたと言われています。

二つめは、ザルツブルク以外で演奏するための作品。こちら

は、多くの初期の弦楽四重奏曲が該当します。来たる旅のために準備したのもあれば、旅先で書いたものもあります。旅先でオーケストラを準備することはやはり難しいため、小規模の編成である弦楽四重奏のために曲を書いたとされています。

そして三つめは、ザルツブルクでのイベントや、貴族のために書かれた作品です。中でも、カッサシオンや、セレナーデ、デイヴェルティメントは、大きな晩餐会や、謝肉祭などにおける野外での演奏のために書かれました。編成も、演奏される際のシチュエーションに合わせて作られているため、セレナーデ第6番「レナター・ノットウルノ」、第7番「ハフナー」のようにオーケストラの編成のものもあれば、数々のデイヴェルティメントのような室内楽の編成のものも混在しています。

ザルツブルクとの別れ

こうして活動しつづつも、モーツァルトは活動が制限されているザルツブルクに不満を持っていました。その鬱憤は1781年(25歳)に爆発します。コロレド大司教と大喧嘩し、新天地ウィーンで、残りの生涯をフリーランスの音楽家として過ごすことになりました。

もちろん大司教との軋轢はきっかけに過ぎず、ザルツブルクは彼



ミラベル庭園。モーツァルトもペットの犬のピンベルを連れてここを散歩していました。

大井 駿 (文&写真)

指揮者、ピアニスト、古楽器奏者。1993年、東京都出身。第1回ひろしま国際指揮者コンクールにて優勝。パリ、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、パーゼルにて、ピアノと指揮と古楽を学ぶ。読売日本交響楽団、東京都交響楽団、広島交響楽団、モーツァルテウム管弦楽団等と共演。



Leoš Janáček

一方通行の愛の力

— ヤナーチェク 弦楽四重奏曲第1番
「クロイツェル・ソナタ」



ヤナーチェクの室内楽作品のなかでも屈指の傑作として知られるのが弦楽四重奏曲第1番「クロイツェル・ソナタ」。「クロイツェル・ソナタ」といえばベートーヴェンだが、なぜヤナーチェクはこんな題を？

飯尾洋一 (音楽ライター)

「クロイツェル・ソナタ」、ただしベートーヴェンにあらず

「クロイツェル・ソナタ」と聞いて、あなたが思い出すのはだれの曲だろうか。ふつう、「クロイツェル」といえばベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」のことだ。

ところがチエコの作曲家ヤナーチェクの弦楽四重奏曲第1番には「クロイツェル・ソナタ」という愛称が付いている。初めて目にしたときにはずいぶん奇妙なネーミングだと思っただけである。ヤナーチェクの曲なのに、なぜベートーヴェンの曲名が愛称として添えられるのか。ああ、やーこしい……。

が、これは誤解だ。ヤナーチェクが弦楽四重奏曲第1番で直接的に参照しているのはベートーヴェンではなく、トルストイの中篇小説「クロイツェル・ソナタ」なのだ。この小説ではベートーヴェンの「クロイツェル」が重要な場面で登場する。ヤナーチェクはトルストイの小説に深い感銘を受けた。そして、ほとんど標題音楽と呼んでもおかしくないほど小説と深く結びついた弦楽四重奏曲を書きあげたのである。

なぜヤナーチェクはこの小説にひかれたのか。ヤナーチェクの晩年の様子を知っている人であれば、小説を読んで「はーん」と納得するかもしれない。

トルストイが小説で描いた恐るべき音楽の力とは

トルストイの「クロイツェル・ソナタ」は、汽車の長旅で出会った見知らぬ者同士の会話から始まる。小説の語り手である「私」は、ボズヌイシエフという名の白髪の紳士から、かつて妻を殺したことを打ち明けられる。

ボズヌイシエフは極論を振りかざすニヒリストで、結婚など長期契約の売春となにも変わらないと言いつつ、自身結婚前に放蕩を尽くしておきながら、愛も恋情もおぞましい下劣なものだと主張する。8年間の結婚生活で5人の子どもをもうけ、その間、次第に妻に対する憎しみを募らせてきた。そこに現れたのが、旧知の間柄のヴァイオリニスト。ヴァイオリニストはあつという間にボズヌイシエフの妻を魅了する。ヴァイオリニストの誘いにより、妻はピアノを弾いて、ベ

38歳年下の人妻へのノンストップラブ！

トーヴェンの「クロイツェル」を共演する。ボズヌイシエフは音楽を通じたふたりの交感におののく。あつ、これはふたりの間になにかが起きている。そう、わかってしまったのだ。そして「私」に問いかける。「あの最初のプレストをこぼしてしまおう！ 恐るべき作品です。まさにあの部分。音楽とは恐るべきものです」 「最初のプレスト」とは、第1楽章の序奏の後に続く主部を指している。その後、ボズヌイシエフは出張にでかけるが、猜疑心と嫉妬心の虜になり、仕事をキャンセルして予定よりも早く自宅に帰る。夜遅く家に着くと、恐れていた通り、妻とヴァイオリニストが密会していた。ボズヌイシエフは壁に吊るしてあつた短剣を手にとり、妻を刺し殺す。間男は逃げた。裁判の結果、裏切られた夫が汚名をそそぐために起きた事件として、無罪の判決が下った(ええっ！)。

さて、問題はこの小説の読み方

Spotifyなど、ストリーミングサービスでも聴けます！



ヤナーチェク:弦楽四重奏曲第1番 木短調 「クロイツェル・ソナタ」他

エッシャー弦楽四重奏団 BIS Records

名曲だけに過去の名盤がたくさんあるが、あえて新しい録音から選んでみたい。ニューヨークを拠点とするクアルテット、エッシャー弦楽四重奏団による2022年の録音。切れ味の鋭さと張りつめた空気感はこの曲にぴったり。併録の弦楽四重奏曲第2番「ないしよの手紙」もカミラへの音のラブレターだ。さらにヤナーチェクの弟子パヴェル・ハースの弦楽四重奏曲第2番「猿山より」も収められ、チェコの弦楽四重奏をたっぷり味わえるのがうれしい。

おすすり音源

だ。ボズヌイシエフは必ずしも共感できる人物ではない。だが、彼の嫉妬に苦しむ気持ちはだれもが理解できるだろう。少なくとも夫の視点から物語を読む。だが、ヤナーチェクの見方は違った。ヤナーチェクは殺された妻の側に共感して「クロイツェル・ソナタ」を読んだのである。1923年、当時69歳のヤナーチェクは、38歳年下の人妻カミラ・シュテスロヴァーに魅了されていた。そしてカミラへの手紙に「トルストイが『クロイツェル・ソナタ』で書いたような、哀れな女性への思いを作品にする」と記した。こうして弦楽四重奏曲第1番「クロイツェル・ソナタ」が誕生する。

た。かといって一切を拒むこともなく、ヤナーチェクが亡くなるまで交流を続けた。ヤナーチェクにとって大切なのは、結婚ではなく、今そこにある恋だ。小説「クロイツェル・ソナタ」を、本来なら結ばれるべきふたりが結婚という制度のために引き裂かれた物語と解しても不思議はない。

スル・ポンティチェロで心がザワザワ

では、弦楽四重奏曲第1番「クロイツェル・ソナタ」がトルストイの小説をどのように題材として使ったのか。音楽はさまざまに解釈できるものであり、正解はひとつではないが、以下のように聴くことができる。

第1楽章は悲痛な調子の「愛の主題」で始まる。小説の冒頭にある見知らぬ乗客同士の会話を思わせるように、ためらいがちな音の対話が続き、これに汽車を連想させるリズムミカルな楽想が加わる。第2楽章では、ヴァイオリニストが妻を誘惑する。夫の苛立ちがスル・ポンティチェロの乾いた音で表現される。

第3楽章は寂しげな主題で始まる。これは小説内に登場するベーターヴェンの「クロイツェル」第1楽章プレストの第2主題にもとづいている。またしてもスル・ポンティチェロで夫の心はかき乱される。第4楽章では「愛の主題」が虚ろな表情で奏でられる。緊迫感が高まり、殺害の場面に至る。揺れる汽車を思わせるリズムが反復され、過去の回想から現在の登場人物へと視点が戻る……。

弦楽四重奏曲なのに、まるでオペラのようにではないか。1928年、ヤナーチェクはカミラとその息子とともに休暇を過ごしたが、ここで雨に降られて肺炎になったことをきっかけに、命を落とす。カミラはヤナーチェクの最期に寄り添うことになった。

世を去る直前、ヤナーチェクは遺書にカミラに有利になるように書き換えたため、死後に未亡人ズデンカとカミラの法廷闘争が起きた。ヤナーチェクにとってカミラはまごうことなきミューズだったが、ズデンカにはさぞ計算的な人物に見えたことだろう。

プロデューサーが行く！
世界の室内楽の現在

クアルテット・インダコ 韓国と京都のフェスティバルに参加

河井拓(大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 総合プロデューサー)



韓国最大規模のクラシック音楽祭が平昌で開催された。そこには昨年の大阪のコンクールで優勝し、グランプリ・コンサートにも出演したクアルテット・インダコの姿があった。インダコの現在とこれからの活躍を追う。



メイン会場のアルペンシア・コンサートホール

コンクールはゴールではなく
新たなキャリアのスタート

昨年の大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023から早いもので1年が経過した。プロデューサーとしてコンクールの運営に携わっているが、敢えて言えばコンクールという存在は、若い音楽家にとって「ゴール」ではなく、「次のキャリアへのスタート」である。1位になった団体は「コンクール」でその活動を終えるのではなく、キャリアのパスポートに押された「優勝」という大鼓判を掲げて、更なる期待に込めていくことを求められる。その意味において、コンクール後の活動で彼らの真価が問われるといっても過言では無いだろう。

昨年の弦楽四重奏部門で優勝したクアルテット・インダコの活動は欧州のみならず、今年は2回もアジアでのフェスティバルに参加するなど、着実にキャリアを展開させている。

リゾート地で開催される 韓国最大規模のクラシック音楽祭

平昌(ピョンチャン)の名前が日本で知られるようになったのは、2018年の冬季オリンピックが契機だったろう。山間が広がる標高の高いエリアで、冬はウィンタースポーツのメッカ、夏は避暑のリゾート地として韓国内で名高い。オリンピックに合わせてソウルからの高速鉄道も整備され、空港からソウル駅を経由した平昌までの案内表示には日本語も併記されているので、日本人もアクセスしやすくなっている。



平昌オリンピック記念モニュメント

この平昌では2004年から、韓国最大規模のクラシック音楽祭「Music in PyeongChang」が開催されている。会場はオリンピックのスキー会場としても使われた Alpensia というエリアで、その名の通りヨーロッパのアルプス地方を思わせるようなホテル建物に、大小のコンサートホールと、コンベンションセンターなどが併設されている。

フェスティバルでは7月24日からの11日間で20のコンサートだけでなく、コミュニティプログラムや各種セミナーが開催され、数多くのソリストに加えて4つの室内楽団、4つのオーケストラ、2つの合唱団が参加していることを見ると、規模の大きさを感じられるだろう。

過去には、日本でも馴染みのミンフン・チヨンの姉であるミンフアとキョンファ姉妹が音楽監督を務めていて、昨年からは韓国を代表するチェリストのサンウォン・ヤンが音楽監督に就任した。(ヤンは2026年に予定されている第12回大阪のコンクールに審査委員としても参加予定だ。)

インダコが再びアジアに

このヤンの呼びかけでインダコはイタリア

オヴァンタラーの創設者で、イザイ弦楽四重奏団でも長年活躍)のコーチングを受けて成果発表のコンサートも用意されていた。

他にもコミュニティプログラムやファミリー向けのアウトリーチなどを通して、未来に向けた育成事業にも配慮がなされている。

インダコの今後の更なる活躍に期待！

インダコは韓国からの帰国後も、ドイツやイタリアのフェスティバルへの参加、またロンドンのウィグモアホールでのデビューなどの活躍が続くが、来る10月には再び日本に戻ってくる。京都府で新しく始まる音楽祭「Music Fusion in Kyoto」のメインアーティストの一員として4公演に出演する予定だ。ベートーヴェンやハイドンの弦楽四重奏曲のほか、クラリネットの名手ポール・メイ工とのモーツァルトの五重奏曲や、ジャズナンバーなども披露する。

これからのインダコの活躍にも目を離せない。

Music fusion in Kyoto

京都府内全域5つの会場で開催するコンサートのうち、以下の会場の公演にクアルテット・インダコが出演します。

2024年

10/12(土)	大頂寺(宮津市)
10/13(日)	舞鶴市総合文化会館
10/14(月祝)	京丹波町役場
10/19(土)	京都府長岡京記念文化会館

詳細は公式ウェブサイトをご確認下さい

<https://music-fusion.kyoto/>



音楽監督のサンウォン・ヤンとクアルテット・インダコ

これがまた上手い)、神聖な雰囲気を作り上げる。会場に集まった韓国のクラシックファンからはブラボーと拍手が途絶えず、古代の舞曲をもう一曲披露した。

弦楽四重奏として活動していくうえで既存のレパートリーを演奏するだけでなく、特別なオリジナリティを有



弦楽四重奏メンターシッププログラム



ミクローシュ・ペレーニによるマスタークラス

から遙々参加。韓国人ピアニストとのコミュニティプログラムに加えて、彼ら独自のプログラムによるリサイタルに出演した。日本のコンクールで優勝した彼らとしては「アジアで活動を広げることは、今後も定期的な目標にしていきたい」とのこと。

プログラムはコンクールでも披露したシューベルトの15番をメインに、ケルビーニの3番、そして中世時代の作者不明の舞曲とチャント。シューベルトでは均整の取れたアンサンブルで、静謐な響きと抒情的な流れを上手く使い分けていた。イタリア人らしく情感たっぷりに歌い上げる部分もあるが、鼻につくようなことは無い自然な流れの構成感で聴衆を喜ばせた。

今回の公演で光るオリジナリティを感じさせたのは、前半に演奏した中世の音楽とアンコールだった。インダコはチェロのコジモ



ヤン ハイドン協奏曲

することは大きな強みになる。今回のプログラムのような古代から中世の音楽だけでなく、各地の民謡や、旅先で出会ったインスピレーションも音楽の素材にしている、つい先日日本で見かけた屋上庭園の印象を弦楽四重奏曲にしたとのこと。バルトークやコダーイのように、世界各地の様々な素材で弦楽四重奏の新たな地平を切り開いて欲しい。

カロウアニを中心に自分たちで編曲も行っているが、その中には中世のチャントや舞曲、世界の民謡から採取された物も数多い。プログラム前半に含まれていたチャントと舞曲もインダコ自身のアレンジだが、単純に当時の音楽を弦楽四重奏に置き換えたのでは無い。当時の旋法をベースに対位法やフーガが顔を覗かせるが、それが突然予想を超える形で展開して気が付けばモダンな響きに移り変わっている。アンコールではケレゴリオ聖歌を演奏し始めたと思ったら後半は同じ声部を4人でハミングして(しかも

これがまた上手い)、神聖な雰囲気を作り上げる。会場に集まった韓国のクラシックファンからはブラボーと拍手が途絶えず、古代の舞曲をもう一曲披露した。

弦楽四重奏として活動していくうえで既存のレパートリーを演奏するだけでなく、特別なオリジナリティを有

■ 2024(令和6)年度 第1回理事会

開催：2024年6月7日(金) ホテルニューオータニ大阪
承認事項：①2023(令和5)年度事業報告書及び決算報告書
②2024(令和6)年度定時評議員会の招集と議題
③助成金選考委員承認(改選期)
選考委員：青澤 隆明(評論)
沼野 雄司(桐朋学園大学・大学院 教授)
横原 千史(評論)
宇野 文夫(神戸学院大学 教授)
※三枝 まり(小田原短期大学 准教授) ※は新任

報告事項：①代表理事、業務執行理事選定
②第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ準備状況と、
会長・理事長・常務理事の職務執行状況

■ 2024(令和6)年度 定時評議員会

開催：2024年6月28日(金) ホテルニューオータニ大阪
承認事項：①2023(令和5)年度事業報告書及び決算報告書
②評議員4名選任 ③理事・監事全員選任(改選期)
新任評議員：足立 憲治(大成建設)、西尾 淳(日本電気)
木戸 毅士(ハウス食品グループ本社)
小城 卓也(三井住友信託銀行)

報告事項：①選考委員承認(改選期) ②代表理事、業務執行理事選定
③第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ準備状況

定時評議員会及び7月1日付2024(令和6)年度臨時理事会(定款第35条・決議の省略)において承認された理事・監事 ※は新任

会長 松本 正義(関西経済連合会・住友電気工業)
理事長 *松田 陽三(読売テレビ)
常務理事 藤門 浩之(日本室内楽振興財団)
理事 *林 直久(大阪ガス)
宮本 信之(関西電力)
山本 卓彦(サントリーホールディングス)
*並木 秀明(住友生命保険)
芝 道雄(ダイキン工業)
四方 貞充(西日本旅客鉄道)
福田 里香(パナソニック ホールディングス)
*米原 伸美(読売新聞大阪本社)
菱田 義和(日本室内楽振興財団)
音楽理事 堤 剛(チェリスト、サントリー芸術財団)
監事 中野 剛志(三井住友銀行)
*竹内 寛(読売テレビ)

■ 2025(令和7)年度 助成金募集について

2025年度の助成金交付事業の募集は2024年10月31日(木)をもって締め切らせていただきます。申請されたものについては2025年1月に開催を予定している選考委員会で審議いたします。なお2026年度の助成金募集については2025年秋に実施する予定です。
お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団
電話 06-6947-2183 HP <https://jcmf.or.jp>

公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社	住友生命保険相互会社	カナデビア株式会社	非破壊検査株式会社	株式会社JTB
関西電力株式会社	大樹生命保険株式会社	川崎重工業株式会社	株式会社電通	株式会社電通
住友電気工業株式会社	東京海上日動火災保険株式会社	株式会社クボタ	大塚製薬株式会社	株式会社ニューオータニ
ソニーグループ株式会社	日本生命保険相互会社	ダイキン工業株式会社	住友化学株式会社	
株式会社東芝	野村證券株式会社	日本製鉄株式会社	積水化学工業株式会社	KDDI株式会社
日本電気株式会社		三菱重工業株式会社	武田薬品工業株式会社	西日本電信電話株式会社
パナソニック ホールディングス株式会社	アサヒビール株式会社	株式会社日建設計	日本ペイント株式会社	
株式会社日立製作所	サントリーホールディングス株式会社			株式会社読売新聞大阪本社
富士通株式会社	ハウス食品グループ本社株式会社	株式会社大林組		株式会社読売新聞東京本社
ローム株式会社		鹿島建設株式会社		日本テレビ放送網株式会社
	東洋紡株式会社	株式会社きんでん		読売テレビ放送株式会社
株式会社関西みらい銀行	株式会社ワコール	株式会社鴻池組		(関連業種別 五十音順)
株式会社みずほ銀行		清水建設株式会社		阪急電鉄株式会社
株式会社三井住友銀行	伊藤忠商事株式会社	大成建設株式会社		阪神電気鉄道株式会社
三井住友信託銀行株式会社	岩谷産業株式会社	大和ハウス工業株式会社		
株式会社三菱UFJ銀行	株式会社千趣会	株式会社竹中工務店		
株式会社りそな銀行	三菱商事株式会社			

コンクール&フェスタ2023からあつという間に1年が過ぎました。今年のグランプリ・コンサートは、第2部門で第1位を受賞したカピバリア・クアルテットがやってきます。彼らの本拠地はドイツ。今回の表紙は、そのドイツにちなんで楽器&食べ物テーマに、Mie.さんに描き下ろしてもらいました。皆さんは、描かれたイラストの楽器名&食べ物名は何個わかりましたか?
楽器：ワグナーチューバ/ヴァルトツィター/シャイトホルト
食べ物：シュヴァルトツヴェルター・キルシュルテ/フランクフルタークランツ/ナポリタンアイスクリーム/レーブクーヘン
プラトアプフェル/バウムクーヘン/プレッツェル

編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団
〒540-8510 大阪市中央区城見1丁目3-50
TEL.06-6947-2183 FAX.06-6947-2198
<https://jcmf.or.jp>
Vol.62 令和6年10月1日
編集：菱田義和 大丸敦子
表紙：9-10Pイラスト：Mie




募メンバー募集! 詳しくは日本室内楽振興財団ウェブサイトから <https://jcmf.or.jp>



ザ・フェニックスホールに集う
トップアンサンブルシリーズ 2025-2026
~コンクール入賞団体が大阪へ再び!


2025 6/8(日) 15:00開演
＜第7回大阪国際室内楽コンクール第2位＞
シューマン・クアルテット(ドイツ) Schumann Quartet
エリック・シューマン(ヴァイオリン)/ケン・シューマン(ヴァイオリン)
ファイト・ヘルテンシュタイン(ヴィオラ)/マーク・シューマン(チェロ)

2007年ケルンで結成。国際的にソリストとしても知られるエリック・シューマンが第1ヴァイオリン兼リーダー、弟のケンが第2ヴァイオリン、マークがチェロを担当。ヴィオラはファイト・ヘルテンシュタインが担当している。ケルン国立音大にてアルバン・ベルク弦楽四重奏団に師事。2013年に最難関といわれるポルドー国際弦楽四重奏コンクールで優勝。以降、ウィーン楽友協会、ベルリン・フィル、ウィグモアホール、コンセルトヘボウ等、世界中の名門ホールで公演を重ね大絶賛を集めて、国際的キャリアを急速に築いている。2016年より3年間、NYのリンカーン・センター室内楽協会のレジデントに大抜擢された。2015/2016年はエステルハーザー宮殿(奥)のレジデントを、また2009年よりデュッセルドルフのロベルト・シューマン・ホールでレジデントを務めている。2022/2023年のハイライトとしてシンガポールへのツアー、アムステルダム・コンセルトヘボウで2回、ロンドンのウィグモアホールで3回演奏を行った。リリースしたCDは、BBCミュージックマガジンアワード、ドイツ・レコード批評家賞、そしてドイツで最も権威のあるオーバス・クラシック賞を受賞している。




2025 10/25(土) 15:00開演
＜第6回大阪国際室内楽コンクール優勝＞
ドーリック・クアルテット(イギリス) Doric String Quartet
アレックス・レディントン(ヴァイオリン)/イン・シュー(ヴァイオリン)
エレヌ・クレマン(ヴィオラ)/ジョン・マイヤースコウ(チェロ)

ドーリック弦楽四重奏団は、昨年結成25周年を迎え、各メンバーはより一層深い解釈を求め続けている。古典派から現代音楽におよぶ幅広いレパートリーをその優雅さと親密な演奏により、世界中のファンを魅了し続けている。その知的な厳格さを持って、ハイドンからメンデルスゾーンまでのクラシックのレパートリーは特別に作られたオリジナルスタイルの弓で演奏し、ブレッド・ディーンなど現代音楽の初演も手掛ける。出演はコンセルトヘボウ、ウィーン・コンツェルトハウス、エルプフィルハーモニーの欧州主要会場だけでなく、カーネギーホール(アメリカ)、サントリーホール(日本)、ムジカ・ヴィヴァ(オーストラリア)など世界中にわたる。また、アダムズの「弦楽四重奏とオーケストラのためのAbsolute Jest」を作曲家の指揮でオーストリア初演を担当した。シャンドスからリリースされたCDは数多くの好評を集め、近年ではベートーヴェン没後250周年の2027年にむけて、ベートーヴェン全曲録音に着手した。後進の指導にも熱心で、2015年から王立音楽アカデミー指導職にあり、さらに2018年からはメンデルスゾーン・オン・マル・フェスティバルの芸術監督を務めている。



2026 1/31(土) 15:00開演
＜第2回大阪国際室内楽コンクール第2位＞
クアルテット・エクセルシオ(日本) Quartet Excelsior
西野 ゆか(ヴァイオリン)/北見 春菜(ヴァイオリン)
吉田 有紀子(ヴィオラ)/大友 肇(チェロ)

桐朋学園大学在学中に結成し、2024年結成30周年を迎えた。「繊細優美な金銀細工のよう」(独フランクフルター・アルゲマイネ紙)と2016年ドイツデビューで称賛された、日本では数少ない常設の弦楽四重奏団。3本の柱『定期公演』『現代曲』『アウトリーチ』を中心に様々なシリーズで室内楽の活動を展開。国際社会における日本の文化交流も積極的に行い、海外公演も重ねている。1996年に大阪国際室内楽コンクール第2位、2000年にパオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール最高位、第19回新日鉄音楽賞「フレッシュアーティスト賞」、第16回ホテルオークラ音楽賞など受賞。2016年にサントリーホールでベートーヴェンの弦楽四重奏全16曲を日本人団体として初演奏。同年6月まで6年間『サントリーホール室内楽アカデミー』にてファカルティを務め、引き続き後進の指導にもあたっている。多数の録音を残している、日本人団体として初のベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲録音を完結させ、2024年12月にはモーツァルト「ハイドン・セット」全6曲の発売を予定している。J:COM浦安音楽ホールレジデンシャル・アーティスト、秋川キララホールミュージック・アンパサダー。



発売日 11月29日(金) ザ・フェニックスホール友の会優先予約 12月6日(金) 一般発売
チケット取扱 ●ザ・フェニックスホールチケットセンター 06-6363-7999
あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー8F 営業時間 10:00~17:00/休業日 土・日・祝日
●チケットぴあ、ローソンチケット(予定)
【主催】公益財団法人 日本室内楽振興財団、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
【問い合わせ】公益財団法人 日本室内楽振興財団 <https://jcmf.or.jp> TEL:06-6947-2184
※日程、出演者は変更になる場合がございます。※詳細は11月上旬頃、日本室内楽振興財団ウェブサイトにて発表します。

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
530-0047 大阪市北区西天満4-15-10
あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー内
TEL: 06-6363-7999
<https://phoenixhall.jp>

